

## “水”は誰のもの?…「ブルー・ゴールド」から

弁護士 永井 弘二



「ブルー・ゴールド」という本を読みました。真保裕一氏作の小説で、解説によると2009年7月から2010年5月まで週刊朝日に連載され、その9月に単行本が出版されました。が、重い単行本の嫌いな私は、例によって文庫本が出版されてから購入したわけです。

大手総合商社に在籍する主人公が上司のミスを押しつけられる形で「関連」の弱小コンサルタント会社に出向させられ、そこで長野県の“水”に関連した仕事をします。その中で何者かによる種々の妨害に遭いながら、その妨害者を突き止めていくというような内容です。妨害者をつきとめていく部分がミステリーの要素を持っており、本の横帯にあるように、「スリリングな頭脳戦&どんでん返しの連続」な展開が十分に楽しめます。他方、物語の背景・底流には、“水”に関する現代の状況が描かれていきます。

文庫本の解説（細谷正充氏）では、「国土面積がさほど大きくない日本は、資源の乏しい国だと思われがちである。事実、石油など、輸入に頼っている資源は多い。だが、他国が羨むほどの、豊富な資源がないわけではない。そのひとつが“水”である。」とされていますが、確かに改めて指摘されると、…なるほどなあ…という感じですね。また、水の惑星であるはずの地球でも大部分は海水で、「人類が利用できる淡水は、2.5パーセント。しかも南極と北極の氷を除いた河川や地下水は1パーセントしかないという。」ということだそうで、こうしてみると、日本の水は確かに豊かな資源であることが実感できます。今でこそミネラルウォーターを飲んだりしていますが、昔は部活の後など、蛇口から浴びるように水を飲んでいましたよね。

表題の「ブルー・ゴールド」の「ブルー」は水を差し、「ゴールド」は「資源」であり、また、商社の扱う「商材」、「金のなる木」のような意味で、「青い金脈」と訳すようです。日本では、“水”は基本的に自治体が扱うものですが、欧米では民間に委託されている例も少なくないようです。ネットで簡単に調べてみると、フランスやイギリスでは民営化が主流で、世界の水3大メジャーはフランスのスエズ、ヴェオリアとイギリスのテムズ・ウォーターだということです。全世界で上水の供給を受けている人口50億人のうち、民営化された企業が水を供

給する人口は4億人ということです。民間活力の導入により、積極的にコストカットを行って、より安価により良質な“水”を供給するというのが民営化の趣旨で、2013年4月、麻生副総理は日本の水道事業を民営化すると発言しました（なお、水道法自体は2001年の改正で包括的な民間委託も可能になっています。）。さらに、私は余り認識していませんでしたが、ネット記事によると、大阪市でも橋下市長は水道事業民営化に積極的で、2012年2月に民営化を宣言しますが、その3月にいったん撤回します。しかし、今年4月、水道運営権を2300億円で売却する方針を改めて示しました。なお、日本では橋下市長が民営化を宣言した2012年3月、フランス・ヴェオリア社の日本法人が松山市から水道事業の一部委託を受けています。

他方、南米ボリビアのコチャバンバでは、民営化により水道料金が跳ね上がったなどとして激しいデモ・抗議行動が行われるという「コチャバンバ水紛争」が勃発し、死傷者まで出したとされています。物語の中では、「ボリビアでは、水道料金が短期間に、驚くなかれ3倍となった。料金を払えなくなった低所得世帯に対して躊躇なく水の供給をストップさせた。月60ドルしか賃金のない世帯に、30ドルの水道代を押しつけたんだから暴動だって起こる。」と語られています（ただ、ネットによると、60ドルというのは最低賃金で、料金もその1/4程度になった、とされています。）。日本の松山市は否定していますが、一部民間委託後、水道料金が約2倍になったと指摘しているブログもあります。松山市によると、民間委託は一部で水道事業自体は市が責任をもって運営しており、料金についても、簡易水道で料金の安かった地域を上水道と同じ程度の料金に引き上げているだけ、ということです。

人間の身体の80%は水分で、あたりまえですが、水は人間の生存にとって根幹となり不可欠なものです。水分補給がないと2、3日で死亡にいたるとも言われています。こうした“水”を「商品」として扱って良いのかというのが根本的な疑問としてあります。これまで自治体などが公共で扱ってきた水についても、規制緩和の流れの中で民営化に向けた動きが出てきていますが、十分な議論が求められていることは疑いなさそうです。